
猫の居る部屋

井沢あや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫の居る部屋

【Nコード】

N0984A

【作者名】

井沢あや

【あらすじ】

ある日、街で寒そうに凍えている子猫のような少女を拾った智範。ここから二人の奇妙な共同生活が始まる……。傷付いた少女を助けてやりたい。それが彼の思いだった。

ブローグ

僕の家には猫がいる。

彼女は気ままで自由な甘えん坊。

無機質な僕の部屋を彼女が彩る。

だから、僕の一人暮らしはなかなか快適だったんだ。

僕が彼女を拾ったのは冬。彼女は小さく丸くなって寒そうに凍えていた。

僕はお人好しだからね。

ほおっておけなかったんだ。そうして彼女はやって来た。

僕の部屋へ。

とても幸せなペットライフ。

でも一つ違ったのは、彼女が“猫”のような“人間”だったって事。かわいい17の女の子だったんだ。

あえて、彼女の事は猫として語らせてもらっよ…。

今日も、僕の一日はペットの声で始まる…。

プロローグ（後書き）

文章力が足りなくて未熟な作品ですが精一杯書いていきたいと思っています。よろしくお願いします。

第一話・迷い猫と出会い

夜になって、人通りもまばらになり、車も次第に見当たらなくなってきた。

田舎ではないが都会とも言えないこの街では夜は若者達の格好の自由時間だった。

そんな中、すでに閉まっている店のシャッター前に屈み込んで動かない少女がいた。

「カモがこなーい…」

10月の寒空の下、すでに4時間も少女はそこに座り続けている。手も足も冷えきって今ならどんなに気持ちの悪い奴にでも着いていけそうだった。（普段は多少値踏みしていた）

いつそのまま野宿しちゃおうかなあ…死んで悲しむ人なんかいないし……。

少女がうとうとし始めた時、ひとつの足が少女の前でピタリと止まった。

「何、してるの？」

“ やつとカモがきた ” と、少女は思った。

少女は顔を上げてその人を見た。どう見てもまだ若く、20代半ば、多く見積もっても30前後のその男は澄んだ瞳で少女をじっと見つめていた。

「…別に何も」

少女は短く答えた。

明らかにカモではなさそうなマジメな風貌にすっかりやる気も失せてしまったのだ。

「寒くないの？」

男は心配そうに言った。

「寒いよ（当たり前じゃん）」

「家来る…？」

予想外な言葉だったが少女にとっては待ちわびていた言葉でもあった。

「うん」

少女はあっさりそう言った。

タクシーに揺られながら少女はその男をじっくり観察してみた。この人どっかおかしいのかな？女なんか買わなくても手に入りそうなのに……。

マジメ男は縁なしメガネに丁寧な顔立ちをしていて、決してモテないタイプではなかった。少女は不思議でなかった。

何よりも、人を安心させる深い濃紺の瞳が魅力的だったから……。対する少女は茶パツにピアス、ミニスカートといったギャルファッションに身を包み、顔には流行りのメイクを施していた。

顔はそこそこ可愛く、少女自身、自分にそれなりの自信を持っていた。

運転手はバックミラー越しに、怪訝そうな顔で二人に一瞥をくれた。

第二話・その理由

時は逆上りく僕>がく君>を拾った日、ちょうどその日の午後1時……。

「別れたいの。好きな人ができたから……」
最愛の彼女はそう言った。

おぼろげな意識の中、彼女のごめんなさいという言葉が嫌にはつきりと耳に残った。

僕はしばし彼女の残したコロンの薫りに包まれ、立ち尽くした。
それでも僕は、昼休みに抜けて来た事を思い出し、律義に職場に戻ったんだ。

ほんとうは仕事なんか放り出してしまいたかったのに。
愛の傷心逃避行なんて、カッコイイものじゃないけど。とにかく何もかもどうだってよかった。彼女を愛していたから。

そんなに、簡単に言ってしまう様な気持ちじゃなかったけど。

——僕は立派だった。

いつも通りに仕事をこなし、いつも通りに人付き合いもした。
もしかしたら少し自暴自棄になっていたのかもしれない。

その証拠に、僕はこの日の事をうつすらとしか覚えていないんだ。
この日の僕は、僕じゃなかった。

有り得ない“もう一人の僕”が“僕”を動かしている感覚。少なくとも僕自身にとってはそれが真実だった。

やけ酒とでもいうのだろうか……25年間（と少し）マジメに生きて来た僕には珍しく、仕事帰りに飲みに行った。

もともとアルコールに弱い体質のため僕はすぐに酔ってしまった。
「酔い醒ましに風に当たって帰ろう」

僕は路地をゆっくり歩き始めた。

20分ほど歩いた先で、僕は哀しそうな子猫を見つけた。
普段の僕であったなら放っておいただろう。見なかった事にした
だろう。

この日は違った。

その、小さな体の、それでいて大きな影をしょっている、猫に、
少女に、心が揺れた。

関わる事の恐怖よりも、興味がまさった。僕は初めて、危ない橋
を迂回せずに渡ったんだ。

「何、してるの？」

言葉は案外あっさりと口から零れた。

少女が顔を上げる……。

ああ、なんて哀しい眼をしているんだろう。僕は助けてあげたい
と、強く、思った。

助ける事で自分が救われたかったのかもしれない。

人は所詮自分のために生きる生き物だから。自分と無関係では有
り得ないのだから。

帰ったら、暖かいミルクをあげてみようか。

第三話・Name

僕の家には猫がいる。

僕の名前は朱家 アケヤトモノリ 知範。

猫の名前はミミ。

と言っても、これは僕が付けた名前だけど。

彼女が付けて欲しいって頼んだんだ。だから僕は彼女の本名を知らない。

それどころか、家の事も、学校はどうしたのかも、誕生日や血液型すら知らないんだ。

何一つ知らない。

それでも不思議と“聞きたい”とは思わなかった。ミミから話してくれる事を望んでいたから。

聞いていたなら、教えてくれただろうか？包み隠さず、僕にすべてを。

心の影を、まとっているあの哀しい闇についてを…。

僕を信じて打ち明けてくれたのだろうか？

「ミミ、ただいま」

「おかえり智くん!!」

ミミが元氣よく玄関までお出迎え。我ながらなかなか悪くない帰宅だと思う。

「今日は何が食べたい？」

「オムライス♪」

僕はすっかりミミの世話係。ミミは女の子なのに料理が全く作れないから。

というよりも、家事全般ができないのだ……。

始めのうちは僕も彼女に仕事を頼んだりもしていた。

しかし、一ヶ月も経たないうちに僕はそれらを自分でやった方がずっと効率的だということに気付いた。

彼女の期待の裏切りぶりといったら天下逸品。

料理を作らせば黒古げにし、おまけに指を切るし、皿を洗わせれば割るし、洗濯をさせれば洗面所を泡だらけにし、掃除をさせれば余計汚すという暴挙に出る。

コメディのワンシーンをそのまま抜き出したような行動に、僕は途方にくれ立ち尽くしたものだ。

そんな経緯があったため、今では僕はミミの世話係に落ち着いたってわけ。

そもそもペットってそーゆーもんだし？

犬や猫よりはずっと賢いしね。

まあ、動物と比較するのはいささか無理があるかも知れないけど、そもそもミミが以前どうやって生活していたのかが気になる所だ。やっぱり何もかも親に任せきりだったのだろうか？何もかもやってくれる様な両親がいるならば、家出なんてしないだろうと僕は思う。

甘いだろうか？

けれど僕は人生平々凡々に、至極平和に過ごしてきた人間だから、ミミの事を本当に理解してあげることが出来ないだろう。

多分永遠に……。

それでも僕はミミと出会ってしまった。

苦しんでいる心に気付いてしまった。

もう後戻りはできない。　なにがあっても彼女を助けてみせる。
今度こそは、しくじりたくない……。

第四話：Name 2 ～過去～

（空が見える……。あたりまえか、ここ屋上だし。あたし横になつてる訳だし。ああ、でも、青いな……。それもあたりまえか。あたしオカシイかな？病んでる？）

少女はポソリと呟いた。

「くっだらない」

これはまだ彼に出会う前のミミの話。

まだ、ただひとりの佐山 サヤマレレキ 響という少女だった頃の話。

辛い記憶……。 響は、制服の紺のプリーツスカートをヒラヒラと風に揺らしながら、学校の屋上からようやく重い腰を上げた。

かれこれ一時間目から三時間も屋上に籠りっぱなしだったのだ。

教室に戻る気になったのは、決して授業をマジメに受けようと思つたからではなく、お腹が空いたからだだった。

辛うじて持ち込んだウォークマンでは、暇は潰せても空腹ばかりはどうしようもなかった。

響はグリコのリズムで階段を降り始めた。

「グ・リ・コ！パ・イ・ナ・ツ・プ・ル、チ・ヨ・コ・レ・イ・ト

……」

「ウ・ザ・イ！ミ・ン・ナ・キ・モ・イ、ゼ・ン・ブ・キ・エ・ロ
！」

響は声に出して笑った。その様子は人が見ればきつと気持ちの悪い光景だっただろう。

響は確かに病んでいたのだから。

響の願い、それは自分を含め全ての生命が抹消されることだった。（消えてしまいたい。消えてしまえばいい。魔法みたいにさっと。地球なんて早くなくなってしまう方がいい。）

ガラッ……。

響はドアを勢いよく開いた。

教室ではすでに古文担当の河合が出席をとっていて、生徒はみな一斉に響の方に目を向けた。

呆れている者もいれば、まるで無関心な顔をした者もいる。

「遅れてごめんなさ〜い」

響はさっさと席に着こうとした。

「待て、何で遅れたんだ！」

（げ〜、始まったよお説教う〜！）

「別に」

響はそう言うと、また席の方に向き直った。クラスメイトは観客顔で二人のバトルを観戦中。

中には授業が潰れたと明らかに喜んでる奴もいる。

（そうやってあんたらは都合の良いときだけあたしを使おうとするんだ……！普段は存在丸無視のくせに！）

この教室には既に響の居場所は無かった。

教室とゆうよりは、世の中と言った方が正しいかも知れないけれど……。

響はどうしても人に溶け込めなかった。

どうやっても、響の風変わりな性格が周りから浮いてしまう。

性格は直したくてもそう簡単には直らないから。そんな環境が次第に響を人間嫌いにしていた。

「待てと言ってるだろ！」

響は軽く舌打ちをした。

「だから理由なんかないつつてんの。バーカ」

（バカは言い過ぎたかな。（笑））

「お前誰に向かって物をいってると思ってるんだ……！」

（あゝあ。河合ってばいたくご立腹なりけり……）

「あんたこそ、自分を一体何者だと思ってるわけ？教師っていうの

はそんなに偉いのか！」

「少なくともお前みたいなクズよりはよっぽど偉いだろうな！」

（クズか……。確かにね。あたしにピッタリの言葉だよ）

響は自分に対して時折自虐的な発想をした。

存在価値も生き甲斐も見つけられない自分が大嫌いだったから。

（どこにも居場所がない出来そこないのあたしは、確かにこの世界のゴミでしかないよね……）

第五話・闇の中へゝ境遇ゝ

物心ついたときにはすでに独りだった。

父親の顔なんか知らない。

水商売をしている母親にほったらかされて育った。

愛情なんて与えられなかった。

家に帰っても在るのは机の上のお金だけ。

母はあたしに何一つ教えてくれなかった。

12の時、母の彼氏にやられた。

何してるのなんて分からなかった。

苦しくて……気づいたら手にお札を握ってた。

あたしは中1で“売り”をやったんだ。在るのはいつもお金だけ

……。

お金はあたしを裏切らない。

お金があれば、欲しいものが買える。

流行りの服が着られる。

おいしいものが食べられる。

頭の中で、何かが切れた。

それからあたしは売りを繰り返すようになった。

でも、それでも、どんなにたくさんお金があってもあたしが満たされることはなかった。

それに気付いてもあたしは売りをやめようとはしなかった。少なくとも、やりたがる男達はあたしを必要としてくれていたから。その最中だけはあたしの居場所があるような気がしたから……。

「君、ひとり？」

「そうだけど？」

「ちよつと遊びに行こうよ」

「えゝ、お金もってるの？」

「大丈夫だつて。奢るし」

この後は、お決まりの定番コース。食事してお泊まり。もう3ヶ月は家に帰ってない。

それなのに母からの電話はたったの一件も入ってなくって、あまりの関心のなさになすがに少しへこんだ。

学校もサボり続けてる。さすがにもう退学になったかな？どうだっ
っていいけど。

「やりたいんでしょ？いくら払えるのって聞いているの」

あたしは不敵な笑みを浮かべて見せた。

堕ちてゆく……。どこまでも堕ちてゆく。

あたしの愚かさゆえ……。

第五話・闇の中へ〜境遇〜（後書き）

こんな作品で誠に恐縮ですが感想などあれば聞かせて下さいm（
ー）m^b r^>

番外編・前編（前書き）

これは、朱家がまだ21歳ぐらいのときの裏話みたいなものです。
あくまでも番外編なので、どうしても読むのがめんどくさい〜とい
うような方は読み飛ばして頂いても本編には差し支えありません（
● ^ ^ ●）

番外編・前編

この世の果てには何があるのだろうか……？
もしも天国があるのなら、あたしの好きな桔梗の華がたくさん咲いていればいいな。

番外編＜初恋＞

初めまして。あたし、神谷 桔梗、シタニキキヨウ14歳、中学生女子。

それでもって、大好きな彼の元に週3のペースで足しげよく通う恋するヲトメでもあるのです。

あなたのためだったらあたし、大嫌いな勉強だってがんばれそうなきがする→→

桔梗はガラスの扉を勢いよく開いた。

（このトビラは愛しの彼への入り口……あたしのHEVENなのよっ！！）

「おはようっ」

「ああ、おはよう神谷。今日はちゃんと宿題やってきたか？」

「えへへ……」

夢が覚めたわ。思いつきりね……。

そう、あたしは大好きな彼のいる塾に週3のペースで通う成績不振の恋するヲトメなのです。そしてあたしのHEVENはただの塾の出入口なのです。

（話が盛り上がるように少し脚色してみたのよ）

「笑ってる場合じゃないだろ？もっとやる気出せ」

「はあゝい」

でもね先生、あたしはあなたといると心臓ドコドキでちっとも勉強に集中できないのよ……。

恋に障害はつきものって、きつとこーゆつことを言うのね……。

myラブリー朱家智範！あたしのハートを射抜いた罪は大きいぞ
っ（アホ）

なんてことを考えてるうちに朱家先生はちゃっちゃと授業を開始。
今から3時間はあたしが先生を独占できる唯一の時間。スバラシ
キ3時間！！（短いっ）

「おい！聞いてんのか？ちゃんとしなさい！」

ありや……（汗）怒られちゃいました。

でもでもあたしってば知らず知らずのうちにカレに見とれてしま
うのヨ。知的な瞳がかっこいいー！！

「ああ、青春っ！」

「はあ！？」

しまったテンション上がりすぎてつい口に出ちゃったわ！！

「何でもないの……。どうぞ続けて」

「大丈夫かお前……。成績下がりすぎておかしくなったんじゃ……。」「
ガン！！けっこーショックー！！そうなの、あたしってばカレ
を想うあまり成績が上がるところか急下降中なのー！！」

「すこしは教えてる俺の顔もたててくれよ？」

ええ！あなたのためでしたら何なりと……。！！

「がんばりまーす」

ダメなあたし……。カレの前だと素直に気持ちも伝えられない……。

朱家先生、あたしのこの溢れんばかりの熱い想い、受け取ってく
れますかー！ー！？

「だめですね」

ええっっ！？テレパシー！？先生ってば異星人？

「集中できないようなので少し休憩しましょう」

なんだ……。そうゆうオチですか……。

「すいません……。どうしても数式を見ていると眠くなってしまっ
て……」

何いってんのよう！違うでしょ！？今がチャンスよ！

「あつ……あああたし、朱家先生のつ……」
「そうよっ！いけっ！！」

「何？」

「先生の……名前、好きです……。ほら、あたしの名前ってちょっと古くさいじゃないですか」

あ……あ、何言っちゃってんだあたし。

「そうかな？俺は好きだけどな。桔梗って名前。かわいくて」

「そう、ですか？」

（かわいいだつて、うれしー……）

「桔梗って、確か変わらぬ愛ってゆう花言葉があるんだよ。いい名前じゃん」

「……先生、男のくせに花言葉とか……ちょっとサムイよ？」
「うるせーよ！」

ウソです。サムイなんて、とんでもない。

うれしくて、うれしい死にしそうです。

この日からあたしの好きな華は桔梗になった。
あたしは桔梗だから、先生への愛は変わらないと思うよ。
今日は花屋で桔梗の花束を買って帰ろう……。

番外編・後編（前書き）

前編とは少し印象の違った作品となりました。ご了承くださいm（
・
）m

番外編・後編

桔梗の花は寒い季節には華を咲かせられないんだよね……。

200X年 12月

あたしはこの日もいつものように、通いなれた塾への道を、ふわ
ふわ舞い散る粉雪の中サクサクと歩いていった。不意に北風がびゅ
うつと吹いて、寒さにあたしは身をよじった。

「おはようございまーす。はぁー生き返ったあー!!」

「あはは、すごいよね外。お疲れさま」

朱家先生はこの日も素敵で、あたしに向けられた笑顔が本当に輝
いてみえた。

(ドキドキ)

「でもこの分だとホワイトクリスマスになりそうですね!」

あたしは少し、ほんのちょこつとだけ、朱家先生とのクリスマス
を夢見たりした。

「お前はクリスマスどころじゃないだろ?ほんとに危機感がないん
だから」

「はい。そう、ですよ」

(がっかり)

「神谷……。ごめん、分かってるならいいんだ。たまには息抜きも
必要だよな」

「いえ、確かに危機感が足りなかったと思います。言ってもらえて
よかった!」

あたしは何とか元気を出して、精一杯の笑顔で答えてみせた。

この頃あたしの元気がいまいち出ない理由は、模試の結果のせい。

第一希望の高校はD判定……。落ちるの確定。

第二希望ですらC判定。もう、どん底。

先生には進路を変えるように言われて、家ではせっかく塾に通わしてやったのにと怒られて……。でもあたしのプライドが、いらないプライドが、こんな時だけしゃしゃり出てきて進路変更を拒むんだよ。恥ずかしいからやめなさいって。

「先生、実はあたし先生にずっと言いたかった事があるんです。もしあたしが受験に受かったら、言ってもいいですか？」

「何？気になるなあ……」

「じゃあ、受かるように祈って下さいね！！」

「もちろん」

約束したんだから先生、本当に当日はあたしのことを思って、しっかり祈ってね。

先生の祈りがあるだけで、あたしはいつも以上の力が発揮できると思うから。

先生は、あたしという1人の人間に対してそれだけのパワーを持つてるんだよ。知ってた？

この約束が、あたしの希望だった……。

2000年 3月

トゥルルルルル……トゥルルルルル……。

午後8時、朱家の家の電話が部屋中に鳴り響いた。この日は日曜日で仕事が休みだったため、朱家は珍しく家にいた。

「はい、もしもし」

「朱家先生……？ごめんなさい、急に電話したりして……」

「……神谷？どうして家の電話番号……」

「塾の人に聞きだして……。ほんとにごめんなさい！勝手にこんな事して……」

「いや、それはいいんだ。でも、どうした？何か用事があるんだろ？」

「ごめんなさい……あたし、先生との約束、守れなかったよお……！」

「約束？」

「落ちちゃったの…滑り止めも、全部！！先生どうしよう……あたし、どうしたらいい……！！？」

「落ち着け神谷！今どこだ？」

「……学校」

「分かった！すぐ行く……！」

多分あたしはすぐ情けない声を出していたんだと思う。しかも涙声。だって電話の向こうで先生、本当に心配そうにしていたから3月といっても空気は肌寒く、あたしはできるだけ小さく、風に当たる面積を少なくしようと、校庭のすみっこにしゃがみこんでいた。

涙（と鼻水）でぐちゃぐちゃの顔をみられないように膝に顔を埋めて、声を殺して泣いた。

「神谷！大丈夫か？」

あたしは顔をみられなくなってくつて、下を向いたまま頷いた。

「まだ二次募集もあるんだし、そんなに落ち込むなよ？大丈夫だから、一緒に頑張ろう」

先生、あたし頑張ったんだよ？テスト前の一ヶ月は寝る間も惜しんで頑張ったよ……！！？

それは、あたしには志望高に行く実力がなかったってことでしょ……？

その場限りの慰めなんてやめてよ！

「神谷……？」

先生、こんな嫌な子を心配したりしないで……。自己嫌悪に押し潰されそう。

「大丈夫……！」

あたしは涙を拭って、大好きな朱家先生に笑顔を見せた。

だけど、泣き腫らした目で笑ったってブサイクが際立ったただけだろうな……。 （苦笑）

「先生、最後に1つだけ、約束は守れなかったけど、言いたかったこと、やっぱり言ってもいいですか？」

「いいよ。何？」

あたしが少し前向きな姿勢を示したので、先生は心なしか嬉しそうに見えた。

「あたし、ずっと先生のことが好きでした」

「え……それって……」

先生は思ってもみなかったと言う顔をした。

「先生に彼女がいるのは知ってます。クリスマスの日に街でみかけ。だから、気にしないで下さい。伝えたかったただけなんです」

「うん。ありがとう。気持ちはとても嬉しいよ」

「じゃあ、今日は呼び出しちゃってほんとにすみませんでした」

「本当にもう大丈夫なのか？家まで送るよ？」

「ううん、少し一人になりたいんです」

「……そっか、分かった。気を付けろよ」

「はい」

先生はあたしの返事に満足そうな表情をして、ゆっくり帰っていった。

途中一度だけ振り返って、あたしに手を振った。あたしも小さく手を振った。

99%の不幸と1%の幸福。あたしにはその2つがつりあって感じられた。たった1%でも、胸一杯幸せだったよ。

ありがとう。

「……もくん。ともくん！」

僕ははっと目を覚ました。心配そうに覗きこむミミの顔が見える。

「だいじょぶ？うなされてたけど……」

「ちよつと、昔の夢を見ただけ……」

「そっか。でも智くん辛そうだからあんまし訊かないことにするね」

「…ありがとう」

気付けば体は汗でびしょびしょだった。あの日のことは、多分一生忘れられない。

あれは僕のせいで起こってしまったことだ。

僕だけが、彼女の運命を変えられたかもしれないかった。

いくらバイトといっても彼女は僕の大事な教え子だったのに……ミスを侵した。後悔ばかりが思いおこされる。

彼女が最後に会ったのは誰でもなく僕だったのだから。

お父さん、お母さん、ダメな娘でごめんね……。

でもあたしは、お父さんが意見をちつとも聞いてくれない事が悲しくて仕方ありませんでした。

あたしに無関心なお母さんが憎くてしょうがありませんでした。そうやって卑屈に育ったから、あたしは友達がうまくつくれませんでした。

ふたりとも、一度だって、あたしが悩んでるって気付いてくれたことある？

あたしの教科書や上靴がボロボロだって、気付いてくれたことがあった？

あたしがあんまり学校に行っていないって、知っていてくれた？
あたしはイジメられていました。

しかも頭まで悪くって、本当にもう救いようがないでしょう？
高校なんて、行ってもどうせ今までの事の繰り返しだよ……。
落ちてしまったことが、かえってあたしの心を決めるのに良かったような気がするよ。

あたしにとって人生は出口のない迷路のようなものでした。

出られないと分かっているのに進みたくはないでしょう？

だからあたしは今日を出口に決めたの。

あたしを苦しめ続けた学校は、出口にぴったりだと思っでしょ？

さようなら。

あたしの死を少しでも悲しんでくれる人が居ることを願って……。

——神谷桔梗の遺

書より

第六話・ネコの心と五月晴れ？

「行つて来ます」

今日もご主人様はお仕事に出かけてゆきます。

あたしは今日一日何をして過ごそうかと思案しながら玄関までついてゆく。

拾われてすぐの頃は、なんて素晴らしい生活だろうと浮かれていられた。

けれどそれは長くは続かず、あたしは毎日暇を持て余していた。中卒のダメ女（しかも元売春婦）を拾ってくれたご主人サマは、高校教師。（そもそも何が目的であたしを拾ったのが謎…）

ご主人サマとは正反対のあたし。

何にもなくて何にも出来ない。こんなあたしが外に出て、1人で何をすれって言うの？

考えながらも仕方がないから、着替えてフラリと外に出てみた。オートロックの自動ドアを抜けると久しぶりに見る直日光が目にした。

「ヤバイ。あたし引きこもり化してるじゃん……」

もつと世界を広げなきゃ、と痛切に思った。前によく行っていたクラブなんかも、こんな昼間じゃやっていない。

遊び仲間の男達には、会ったら性関係を求められる。

そうじゃない安らぎを見つけてしまった今は、もう彼等には会いたくなかった。

街に出てショッピングでも楽しもうかなと、そう思った瞬間、あたしはもうお金が残っていないことに気付いたんだ。

売りをしていた頃はお金が底をつくななんて事、考えなくったって良かったのに……。

「どうしよう……」

不安が胸一杯に広がっていく。

心が弱いあたしは、すぐに売りをまた始めることを考えた。

「ダメだよ……。智くんに嫌われちゃう。やめろって言われたでしよう！？」

あたしは自分に言い聞かせて、残金210円でパンを一つだけ買った。

今のあたしがすがれるものは智君だけ……。

ふと、本当にそうなのかと疑問に思った。

「この生活はいつまで続く？ 智君に彼女ができたなら？ 結婚したら？ あたしはどうすればいいのかな……？」

追い出されるより他にない……。すがれるのは自分自身だけだ。

この時ほど、自分の頼りなさを恨んだ事はなかった。そして、たぶんこれから先も……。

河原で、響は仕方なく最後のお金で買ったパンを食べていた。

近寄りがたい負のオーラをかもし出しながら。

「喉乾いたし……」

響はポツリとつぶやくと、周りをキョロキョロ見渡した。すると、橋架下の日陰の所に1人の男が立っていた。隠れるように、ひっそりと。

（よしっ！なんとかして奢ってもらおう）

響は安易にそんなことを考え、軽快に男の方へと近付いて行った。

ネコの心と五月晴れ？

すぐ近くまで寄ってみると、次第に陰になっていてよく分からなかった男の服装や様子が見えてきた。

ユルめのジーンズにジャケットを合わせたカジュアルな着こなしで、オシャレな帽子を被っている。

更によく観察してみると、左手には何か冊子を持っているようだった。

「すいませ〜ん！ちよつといいですか？」

あたしはとびきりの営業スマイルと甘えた声で、ここぞとばかりに媚を売る。

「あのお、この辺りで黒いこのくらいの財布みませんでした？」

あたしは手で大きさを指し示しながら言った。

「財布？この辺で落としたの？」

そう言うて振り向いた男は予想外にイケメン（死語）で、不覚にも思わずたじろいってしまった。

「はい！……たぶん」

（これは騙せなさそうだなあ〜）

あたしは焦りながらも、出来る限り自然に見えるように答えた。すると、男はなぜか突然クスクスと笑いだした。

気の短いあたしは当然怒りだして、男にくってかかった。

「あたし、何かおかしいこと言った！？」

せっかく売った媚が台無しになりました

「お前さ、人を騙すつもりならもっと巧くやれよ。演技力0！バレバレ」

「悪かったわね！だいたいあなたにお前呼ばわりされる覚えはないんですけど？」

あたしはカアツと熱くなるのを感じて、口から漏れたのはこの可愛げのないケンカ腰の台詞だった。きつと耳まで真っ赤になっ

と思う。

「だいたいね、あたしは別に騙そうとした訳じゃないんです！緊急事態なの！少しくらい人に助けを求めたっていいじゃない！！」

「ふん。で、緊急事態って何？」

男はニヤニヤしながらイヤミを込めてそう言った。

「それは…その、お金が無いっていうか…せつ羽詰まっててえ……」

「やつぱりな。俺、お前みたいな女一つ番嫌い！ちよつと可愛いからって調子こいて、何もなくても何でも手に入ると思っててさ。

やつぱ女は中身が大事だよなあ。俺はお前みたいなバカ女に、ぜってえ金なんか出さねえからな！」

「そんなこと思ってないっつーの！」

「じゃーねー。あいにく俺は多忙ですので。またね、バカ女ちゃん」

♪

「ムツカツクくく！！あんたみたいなイヤミ男、二度と会いたくないわよ！！」

男は手をヒラヒラ振りながら河原の土手を登って行った。

あたしは治まりきらない苛立ちを抱えながら、男の姿が見えなくなるまでその場に立ち尽してしまった。

この時の心情を一言で言うのなら、まさしく“最低”である。

ネコの心と五月晴れ？（後書き）

話の続きが苦しくなってきたので登場人物を増やしてみました（＊
^ ^＊）

感想・評価など厳しいものも受け入れ、少しでも良くしていきたいので何かありましたらお願い致します。

第七話・淡い恋心

君と出会ってから春が来て、夏になった。

君との距離が縮まるほどに、内と外との二人の僕はどんどん、どんどん離れて行く。

だけれど今いる二人の僕は、何れも元々の僕ではない。

元々の僕は何処へ行ったのだろうか？

分からない、

ただ、

僕は変わってゆく……。

君に触発されて。

いつも私を不自由にさせたモノ……、どこかに私が忘れてきてし

まったモノ……。

信じる心、

大切に愛しいそれを。

私はいつだって、本当は人を心から愛したかった、愛されたかった。……必要とされたくて堪らなかった。

私の願いは、いつだって叶えられない。

分かっているのに、私はまだ甘い希望を持つのかな？

期待したって傷つくだけなのに。

私は変わってゆく……。

彼に影響されて。

遠くの方に、御主人様がチラリと見えたような気がした。

一瞬、声を掛けようかと迷ったが、すぐにあたしは外で彼にバツタリ会うのは初めてだということに気付き躊躇した。（正確に言えば出逢ったとき以来だけ）

考えてみれば、あたしと智くんは一步家から出てしまえば、何の接点もない。

智くんからすれば、自分の教え子と同じくらいの年齢のあたしと並んで歩くのは不快な事でしか無いだろう。

この時あたしの中に、何か、不思議な感覚が生まれた。

今まではなかった感情、もしくは意識していなかった感情。

あまりに心地よかったから、考えようとしなかったんだ。

あたしの気持ちを。

智くんに対する気持ち、あたしが智くんをどう思っているのかを。外に出ていつもと違う顔をしてる智くんを見て、少し遠い存在の彼を見て、少女マンガなんかじゃ無いけど、あたしのハートは確かに痛んだんだよ……。

一緒にいて心地いいのは、好きだからだよ。

勇気を出して、あたしは智くんに話しかけようと彼に近づいて行った。

「智範！」

声を掛けようとした、まさにその時、反対側から誰かが彼の名前を呼んだ。

向こうを向いた彼が、やってきた清楚な女の人に笑顔を見せている様子が、あたしには手に取るように分かった。見えもしないのに……。

あたしはまた傷つくのだろうか。

まだ、間に合う……。まだ、そんなに好きじゃない。

大丈夫、本気じゃないから……。

「お……お兄ちゃん！」

本気じゃないけど、この悲しみに、デートをちよっぴり邪魔するくらいの価値はあるでしょう？

振り向いた智くんの腕に思いつきり抱きついた。

「お兄ちゃん、久しぶりだね！全然帰ってきてくれないんだもん！」
あたしは青くなってる智くんを後目に、にっこりイジワルに笑って見せた。

「え？あ、え」と……ああ、うん。ごめん」

（ミミの奴何考えてんだ！？）

「あれっ？もしかしてお兄ちゃんの彼女さん？はじめまして、妹の響です」

朱家 響、なかなかいい名前じゃん！

そうしてあたしは初めて彼女の顔を真っ直ぐに見た。

美人、としか言いようがなかった。

背がとても高いとか、目がすごく大きいとか、そういう派手な美しさじゃなくて、整った、綺麗な顔立ちをしていた。

「はじめまして、ソダシズバ 園田 静羽です」

シフォンスカート、キャミに春色シャツ。

大人で清楚な園田さんはあたしとは正反対のタイプだった。まさにお嬢様って感じで。

「あゝ、えつとごめん、すぐに帰すから。ちょっと待ってて」

智くんはあたしを腕から引き離して、彼女に聞こえないように後ろを向いてヒソヒソ話し始めた。

「バカかお前は！バレたらどうする！？」

「バレないようにするもん！あたしだってたまには外で智くんと一緒にいたい！」

「ダメなもんはダメ！さつさと家に帰って留守番してなさい！」

「こんな時だけ御主人様風吹かせないでよ！留守番ばっかでもうウンザリだもん〜！」

「おみやげ買って行ってやるから。な？」

おみやげなんかに釣られるもんか。どれだけ子供扱いしてるのよ！
「イヤッ！絶対帰らないんだから〜！！」

あたしはわざと彼女に聞こえるように叫んで、嘔泣きまでもしてみせた。

「あたし……本当は家出して来たの！帰る所なんてないんだからっ！」

「ミ……響、ワガママ言うんじゃない！父さんだって心配してるぞ」
「あの人は、あたしがいない方が都合がいいのよ！」

あたしは大袈裟な芝居とメンソレータムの涙で、見事園田さんの心を動かした。

「私は別にいいわよ？そんなに嫌がってるのに無理に帰すなんて可愛そう」

「でも……」

「家出くらい誰だって一度はするわよ。兄弟なんだし何日か匿ってあげたっていいんじゃない？」

「……分かったよ。少しだけだからな？」

「うん！ありがとう静羽さん！」

智くんも遂に根負けして、あたしにデート付き添いの許可を出した。不服そうに……。

第1Rはあたしの勝ち。

今日一日、ひっかき回してやるから覚悟してろよ！智くん、あたしに隠し事してたことを後悔するがいい！！！！

今までだって逆境ばかりの人生だった。今更これしきのことだめ
げてたまるか！

第七話・淡い恋心（後書き）

響と智範は2人で生活する事によって、お互いにいい意味で変わって行く……と、いうようなことを書きたかった訳ですが今までの所、全然表現出来てませんね（●、U、●、;、ゞ

第八話・彼女の方が一枚上手

〔第2R〕

「どこ行く？」

「智範が決めていいよ。私はどこでもいいから」

2人が歩くその後ろを、あたしはテクテクついて歩く。

あたしだって智くんを横を歩きたいっつーの！！

「あたしオナカ空いたなっ！」

無理矢理話に割って入るあたし。かなり切ない……。

「じゃあ先に食事行こうか。静羽は何が食べたい？」

あくまでもあたしを無視しようとする智くん。

関わりたくないのは分かるけど、あまりにヒドすぎやしませんか？

家じゃベタベタしたってちつとも怒らないくせに。

「私、優柔不断だから決められないの。ごめんね、直さなきゃって分かってるんだけど……」

「いいよ。じゃあ少し行ったらおいしい洋食屋があるからそこでいい？」

「うん。行きたいな！」

ダメな女でごめんなさい、謙虚さアピールしてるワケですか？

店に着いてからもことごとく2人の世界で、ついて来なきゃ良かったかな、なんて。

それにしてもなんて完璧な人なんだろう。

今日、今までの所、女の私から見てもイヤなところが一つも無いなんて……。

「で、お前は何にすんの？」

うつわ、冷たいお言葉。

「……ハンバーグ」

智くん、すかさずガキだなあとバカにしてる視線をあたしによこ

した。

あたしもすかさず“悪かったわね”とアイコンタクト。ちよつぴり嬉しかったりして。

まあ、確かにハンバーグはガキ臭かったかも……。

対する（あたしが勝手に敵対してるだけ）静羽さんは冷製パスタ。なんかオシヤレで且つヘルシー。

美容にもいいなんてもしかして計算ずく！？

テンション急激に下がってきた所で一旦パワーを充電してこようかな。

「あたし、ちよつとトイレ」

「あ、私も行こうかな。お手洗い」

お手洗いって言うな！あたしのガキさ加減が際立つじゃない！！何故か便乗してきた静羽さんと気を使いつつ連れション。と言っても化粧直しだけ。横に並ばなくちゃならないのが更に辛い。

「響ちゃん、今高校生くらい？」

「はあ……。そうですけど」

年齢はね。

「学校は？家出って、大丈夫なの？」

なんだ。この女、本当はあたしに帰って欲しいんだな。別にいい人じゃないや。

「大丈夫よ。そんな事より、静羽さん、それ、地じゃないでしょ？」

一か八か、鎌を掛けてみようかな。幸い店の最も奥にあるトイレでだったら、どんなにイジワル言っても智くんには聞こえないから。

「はい？」

「お兄ちゃんの前だと猫被ってるでしょっていつてんの」

「……そんなことないわよ？」

「ふん」

「なんか……嫌われちゃったかな？」

「別に。ただ、あたしブラコンだからさ、彼女とかちょっとウザイだけ」

(にっこり)

さて、どうでるかな？

「つまり響ちゃんは、私に智範と別れて欲しいんだ？」

「えー??こんなこと言いたくないけど……出来れば別れて欲しいなっ」

「無理っ」

イヤミが飛び交うあたし達のバトル。笑顔なのに、火花散る散る

夏日和。

「やっぱ猫被ってたんじゃん!!」

「違うわよ？智範の前では一番素敵な私を見せようと努力してるだけ。誰だってそのくらいするでしょう？それに別れるって言われて別れるバカが何処にいるのよ」

「あたしはそーゆー計算高い女大っ嫌いだからしないよ。ありのまを好きになつて欲しいもん」

「ふーん。ま、勝手にすれば？」

「性格悪ーい！あたし貴方に負ける気しなくなってきた」

「響ちゃんもそうとう悪いと思うけど？ま、計算も出来ないガキにあたしが構うまでもないか。やっぱ女は少しくらいちゃっかりしてないとねえっ」

「お兄ちゃんだって計算高い女は嫌いだよ！兄妹だからね!!」

「なによ、所詮妹でしょう？一体どうしたいの？あたし達はお互い好きあつて付き合ってるんだからね？」

入るスキマは何処にも無いわよ、と威圧的な目付き。

「お兄ちゃんと、ずっと一緒にいたい……。その為には、あんたが邪魔なのよ!」

今誓う、あたしこの女にだけは絶対負けない!

「ふーん。響ちゃんはあたしの敵に回るんだ？智範の妹だからって容赦しないからね」

闘志を燃やしつつ席に戻った。すぐ顔に出るあたし。ライバル宣

言したての彼女は、顔色ひとつ変えずに爽やかな微笑みを浮かべている。

「もう料理届いてるぞ」

智くんは、不思議そうにあたしと彼女を見ながら言った。

「ごめん、女同士で盛り上がっちゃって。ねー響ちゃん」

この切り替えの早さ、悔しいけれど見習いたいです。

やはり、彼女の方が一枚上手。

勝てる確率は万に一つもない……。だけど戦うんだ、それが女の意地ってもんでしょ！

第八話・彼女の方が一枚上手（後書き）

2人のバトルはこの先もつとつとヒートアップしていく予定です。
こつこ期待（^U^）ノ

第九話・季節外れの夏休み1（前書き）

しばらくぶりの投稿となります。読んで下さっている心優しい読者様、本当に申し訳ございませんm（＿）＿（mこれからもゆっくり進めていきたいと思っています。

第九話・季節外れの夏休み1

第3R

記録に残る真夏日に繰り広げられた熱いバトルは、残暑ののこる秋口まで引き伸ばされていた。

あたしはあの日から、負けないと誓ったライバルに一度も会っていない。

もし遭遇した時の対策もばっちり立ててあるのに。なんだかさっぱりしない気分。

それというのもあの日から、智くんがあたしを静羽さんに会わせようとしないうせいなんだけど……。

まあ、あたしだって毎回毎回デートの邪魔なんてしたくない。

当たり前といえば当たり前んだけどさ……。

「ただいま」

いつもなら大喜びでお出迎えするとこだけど、最近あたしはちょっぴり反抗期。部屋に入って来た智くんは、TVに視線を向けたままおかえりって言った。

智くんは、そんなあたしをしようがないなって顔で見てる。

そうやって、優しく見つめられたら、あたしの中の甘えたいって欲求が膨らんじゃうからやめて？

彼女が一番大切なくせに、あたしの心まで占領してく……ズルイ人。

「何をすねてんの？僕に彼女がいたこと？ごめんね、話してなくて智くんはあたしの隣に座って、髪を撫でながらゆっくりと話す。

心地よさにあたしは目をつむる。

「あたしの事、捨てたりしないでね……」

胸がキュウって締め付けられて、あたしは溢れそうな涙を堪えな

がらやつとそれだけ言った。

智くんは、ただ優しくあたしを受け入れてくれた。
質問には答えがなくて、あたしの喉に堪えた涙の苦味が広がった。

目前に広がるは、海。季節はずれのパノラマには、あたしと智くんしかいなかった。

少し肌寒いけど、青と白しかない景色が、そんなの忘れさせてくれた。

最高の気分だよ。

「きつもちいゝい！智くんもおいでよ」

海に足だけつかってはしゃぐあたしを、困ったような顔して智くんが見てる。

今、何を考えてるのかな？人の気持ちが分かればいいのに。

「風邪ひくなよ」

智くんはあたしの呼びかけを無視して、浜辺にセットしたキャンブ用チェアでくつろぐ。

「おじさん……」

「なんか言った？」

うわあ、地獄耳だあ……。今めっちゃ小声で言ったのに。

1人で波と戯れててもつままないよ。智くんのバーカ。

——そもそもなんであたし達がここに来てるかって言うと、月日は夏にさかのぼる。

どこもつれてつてくれない智くんに痺れを切らして、あたしは夏中に海に行く約束を（無理矢理）取り付けたんだ。

そりゃあもう、ゴイングマイウェイ（つまり自己中）にね。

ところが、智くんはその約束をすっかり忘れてそのまま放置。

ある日キレたあたしが帰ってきた智くんにいきなり助走付飛び蹴りをかました結果（つまり実力行使）、スケジュールの空いてた今日、晴れて海にやって来ることができたってワケ。

おかげ様で秋になっちゃったけどね……。

「智くん、ビーチバレーならやる？」

今度は目の前まで近付いて言った。

「やらない」

一瞬瞳を上げてこつちを見ただけで、智くんはすぐに手元の本に視線を移す。ひどいと思うのはあたしだけ？

「砂のお城は？」

「作らない」

即答ですか……。つつーか、

「じゃあなにしに来たのよ！」

あたしの言葉に、智くんは本を閉じて深く溜め息をついた。

「お前が来たいって言ったんだろ？」

「智くんと一緒に、来たいって言ったの！」

あたしはカッとなって言った。

「俺は見てるだけで満足です」

智くんは、有無を言わせぬ必殺スマイル。あたしは言葉に詰まっ
てしまった。

「それじゃつまんない……」

あたしはそれだけ呟くと、予約してあるホテルの方へ踵をかえした。つまりはスネたわけだけど、荷物は智くんに全て持たせるとい

う軽い復讐も忘れてない。

「おい！待てよ！」

待てと言われて待つ馬鹿がどこにいる。あたしは更にスピードを上げた。背後で小さくなつてく智くんの声に軽く良心を痛めながら、あたしは尚もズンズン歩いた。

こんな時、静羽さんの前にいる時の智くんが脳裏をかすめて、あたしの胸はキリキリと痛むんだ。

どうしてそんなに、幸せそうに、嬉しそうに、愛しそうに、優しい瞳で、最高の笑顔で、貴方の全てで、あたしには見せない表情で、この世で一番大切な人として、あんな女を見るの？

あたし以外の女に、そんな優しい笑顔を向けないで。あたし以外の女を見つめたりしないで！

あたしの事を、この世で一番大切な人として見て欲しい……。

こんな歪んだ愛情が、彼に届くことはないって、本当は分かっているんだ……。

季節外れの夏休み2（前書き）

お待たせしました。しかもかなり短いです。すみません（<―>）

季節外れの夏休み2

波の音は、あたし達が宿泊するホテルまで届いていた。

あたしはその音にうつとりと聞き惚れながら、一人窓辺に座っていた。

一人ぼっちなのは、智くんが酷いヤツだから。あいつってば、知らないうちに部屋を二つもとってたんだ……。

こんなのつまないー！！

——コンコン

誰かが部屋をノックする音。それはすぐに智くんだと分かった。

「ミミ、出てこいよ。飯食いにいくぞ」

あたしは膨れっ面のままドアを開いた。

「ははっ、なんだ。まだすねてたのか？ごめんごめん」

智くんはそう言っであたしの頭を撫でてくれた。

幸せ？なのかな。分からない。ジーンと響く甘い感覚が、暫く髪に残っている気がした。

ご飯を食べ終えホテルに戻ると、あたし達はお風呂に入る事にした。海の見える露天風呂があるとかで、割と楽しみ。

お揃いの浴衣に身を包み、腕を組んで歩く。周りからはカップルに見えてるかな？見えてるよね。

「じゃあな」

案の定、お風呂も別。あたしは混浴だってちーっとも構わないのに……。智くんの根性なし！

なかばやつあたりの思考を浮かべながら、あたしは女湯の暖簾をくぐった。

もちろん、露天風呂だけ混浴だった、なんてありきたりなサプライズが起こる事もなかった。

「智くん……旅行、来た意味全く感じないんですけど」
すっぴんのあたしはちよつと抜けた顔だ。

「そう？俺は楽しいけど」

自販機でジュースを買いながら、智くんはひょうひょうと答える。
「違って！もつとこう……一緒の時間を作ろうとして欲しいってゆうか」

「一緒にいるじゃん」

言いながら、あたしにイチゴミルクを差し出した。

「どこがよ！海も、部屋も、お風呂も、ゼーんぶ別々じゃない！」

「普通風呂は別だろ。彼女じゃあるまいし」

ああ……痛い一言。言い返せない自分が悔しい。

「じゃあ、部屋来る？」「うん！」

待つてました。その言葉。仕方なさそうな表情はともかく、がんばれあたし、あと一押し。

「寝るときは自分の部屋に戻るんだぞ」

「はい……」

入ってしまったばこつちのモノ。絶対に、戻ってなんかやらないんだから。

ある意味一大決心をしながら、あたしは智くんの部屋に足を踏み入れた……。

第十話・心に嵐が吹く夜に

今の状況は、一言で言うなら沈黙？

あたしは智くんの部屋のベットに座り、智くんは窓際の椅子に座ってる。ちょうど、あたしに背を向ける形で。

「なんでそっちに座るかなあ!？」

「お前が向かいに座ればいいだろ？」

「お前って言わないで!」

あたしはつい声を荒くしてしまった。

せっかくの楽しい旅行中に、どうして喧嘩なんてしちゃうかな？
ブラウン管の中のバラエティ番組に見入っている智くんに腹を立てたせいかな……。

「ねえ、なんでそんな態度なの？いつもみたいに隣に座って、頭撫でてよ!」

やっと振り向いた智くんの顔には、疲れの色が浮かんでいて。あたし、ペット失格かな？癒すどころか、迷惑ばかり……。

ペットにすらなれないのに、彼女になりたいなんて雲を掴むような話。

「ミミ、俺だつて疲れるよ。正直スケジュールだつて厳しくて、ミミの為に無理してここまで来たんだ。部屋でくらい静かにさせてくれ」

ああ、そうか……。忘れてた。

「……智くんまで、あたしを否定するの？」

「ミミ?」

あたしは出来損ないの失敗作なんだつた。智くんの側があまりに心地よくて、忘れてたよ。

「智くんも、あたしといえるの、嫌になつたんでしょ?あたし……ダメな娘だから、もう捨てる気なんだ……。そうでしょ?そうなんだ……!!」

あたしはいつの間にかその場に崩れ落ちて、大声で泣き出していた。

ベットに泣き崩れるあたしに、智くんの気配が近付くのが分かった。怒られる？あたしは込み上げる鳴咽を堪えながら身を固くした。耳鳴りがする……。

「ミミ」

智くんがあたしを抱き起こす。あたしは顔を智くんから反らした。

「こっち向いて、ちゃんと話し合おう」

「やだよお……ひつく。捨てないで……」

鼻をすするあたしに智くんはティッシュを差し出す。

「大丈夫だから」

あたしのぐちゃぐちゃな顔を智くんが拭いてくれた。いつもみた
く、優しく穏やかに。

「智くん……智くん側にいて……」

“好き” って言葉が、喉まで出かった。

「不安にさせてゴメンな」

なんで？いつかは捨てるんでしょう？最後のご褒美旅行じゃないの？
訳も分からずあたしは智くんの胸に顔を埋めた。細いの、やっ
ぱりがつしりしてて、男の人だなんて思う。

智くんに抱き締められただけで、心の中の嵐のようなものが、す
うっとおさまって行くのを感じた。

「落ち着いた？」

あたしは、ウサギみたいになってるはずの目で智くんを見上げた。
智くん、眉毛が下がって、ちょっとかわいい。

「……ごめんなさい」

心音が、やけに大きく聞こえる。先に目を反らすのは、あたし？
それとも智くん？

言葉はない。だけどゆっくりと、確実に、時は進んでいく。

智くんの呼吸を、近くに感じる。近付いてくる。もう、すぐそこ
に……。

ドクッ……。

心臓が、止まった気がした。

頭の中に、パニックってるあたしと、キスするの久しぶりなんて考える冷静なあたしとが居たりして。だけど体だけは素直に本能に従い、智くんの背中に腕を回す。

触れ合うだけの、幼いキス。

もうずっと、そのまま居たいと思った。

けれど、時は止まらない。

そっと、唇が離れていく。物足りなさ、胸を襲う。やはりあたしは、盛のついたメスネコでしかないのかもしれない。

——汚れた過去は一生消せない。

何よりも、智くんの真意が掴めなかった。あたしを好きだという風には、何をどうしても考えられなかった……。

思えば、こんなに人を好きになったのなんて初めてで、あたしは困惑してたんだ。

第十一話：With You.

あたしは多分、泥棒猫って言われても仕方のないことをした。わざとやった訳じゃないけど、それでもやっぱり静羽さんに対して少しの良心の呵責はある。

前のあたしなら、してやったりと思うところなんだけど……。今はそんな気分には到底なれなかった。

1泊2日の夏休みはあっさりと終わり、あたしはいつも通りに日々を過ごしていた。

智くんはというと、まるで何事もなかったかのように自然で、いや、まるで何事もなかった事にしようとしてるみたいに不自然だった。ここでの矛盾は、すべてあたしの頭の中で起こってる事で、つまり実際の智くんはそのいずれかではないんだと思う。

あんまり難しい事を考えるのは二ガテだから、あたしが解るのはここまで。智くんの気持ちとか、考えなんて、これっぽっちもわからないよ……。

「ミィミ。起きろよ」

「んゝも、ちよつと……」

「今日は休みなんだけどな。どっか連れてってやろうと思ったのに」
あたしは一気に飛び起きた。

「今起きた！起きたよ！」

「おはよう」

智くんからお出掛けに誘うなんて、なんの気まぐれかな？ やっぱり、少し変かも。

智くんの笑顔が朝日に照らされて綺麗で、ドキリとした。

「朝食すぐ出来るから、顔洗ってきな」

当たり障りない会話をしながら朝食を食べ、それから大急ぎで出かける準備をした。

ポーカーフェイスの智くんと違って、あたしはあの日から妙に意識してしまって、無邪気にすり寄ったり、甘えたりは出来なくなっていました。その点で、あたしと智くんの関係は、以前よりギクシヤクしてるって言えるかもしれない。

「ねえ、どこ行くの？」

車の助手席に乗り込みながら、あたしは尋ねる。

「ミミの行きたい所」

「えっ？えーと……、どうしよう」

智くんと一緒なら何処だって良かった。いきなりそんなこと言われて、頭が真っ白になる。

「じゃあ、とりあえずドライブして。それから食事でもするか？」

あたしは小さく頷いた。

「なんか、智くん最近妙に優しいね」

「前からだろ？」

また、そんな風に冗談めかしてはぐらかす。

「甘いよ……前より」

智くんは、訳が分からないといった顔をした。

訳が分からないのはあたしの方なのに。

「晩御飯は、夜景の見えるレストランがいいな」

「よし。了解」

車は静かにモーター音を響かせながら、行く当てもなく進んでいった。

静羽さんにもう一度会って、きっちり話し合えたなら、あたしの胸にかかる霧は晴れるのかな。

視界がボヤけて、なんだか夢の世界に居るみたいだよ……。

目が覚めて、また前の生活に戻ったとしたら、あたしはどうなってしまうんだろう？

生きていく、自信はない。

第十二話：愛の人

車は、順調に道路を進む。

「そうだ、見たい舞台がやってるんだ。嫌い？見たくない？」

突然、静かな車内に智くんの落ち着いた声が響いた。

「ううん、見てみたい！そうゆうの一度も行ったことないから……」

「すぐそこなんだ」

智くんの無邪気な笑顔がすごく新鮮。出会ってからあと少しで一年になるのに……。それなのに、あたしが知っている智くんはほんの一部で、理解しているのは更にそのまた一部。

それが、当たり前なのかもしれないけど、どうしようもない事なんだろうけど、あたしには智くんが一生分かり得ない人に思えて寂しい。

毎日毎日、新しい智くんと、新しい自分と出会っていく。それは、誰でもない、智くんのおかげ。感謝してるよ、口には出せないけど。

劇場に着くと、智くんは柄にもなくレディーファーストとか言っ
てドアを開けてくれた。手をとられ、ちょっとしたお姫様気分。お
気に入りのフレアスカートを履いてきたことに、今更ながら感謝し
た。

綺麗な石の床を踏みしめながら、あたしは尋ねた。

「なんていう劇？」

「ミストレス。恋の物語だ」

あたしは思う。普通恋愛モノは彼女を誘うんじゃないかって。

智くんはあたしの心の葛藤なんて知るよしもなく、説明を続ける。

そうして最後にこう言った。

「ミミもきつと楽しめると思うよ」

あたしはにつこり笑って頷いた。それは、お愛想でも、媚でも、

作り物の笑顔でもない。

——幸せ？

ううん。分からない。

——不幸？

昔はね。でも今は……。

——どっちかずなの？

そうかな？どうだろう。

あたしの中の、二つの自我が対話する。

劇は難しかったけど、主役の女性が愛人で、胸を痛めてる気持ちだけは良く分かった。もしかしたら、感情意入、してたのかも。

あたしが愛人で智くんは彼、静羽さんは本妻だ。

この物語とおなじように、あたしの物語もハッピーエンドになればいいのに……。

毎日、毎日。繰り返し、あたしは叶わぬ夢を見る……。

第十三話：キラキラ

それからまた車を走らせて、あたし達はディナーと洒落こんだ。夜景の見えるレストラン。智くんは偶然見つけた様なふりしてたけど、あたし知ってるんだ。こーゆうトコは、予約無しじゃなかなか入れないんだよ。

周りはお洒落な紳士淑女ばかり。あたしもちよつと気取ってワインなんて頼んでみたりして。味なんて、わからないクセにね。

「智くん安月給なのに、こんな高そうなお店大丈夫？」

「そんなこと心配するなって。今日はミミが楽しんでくれればそれでいい」

智くんはいつも、あたしを安心させる魔法を簡単に使う。

夢かと思つて、膝の上でコツソリ手の甲をつねった。すっかり痛かった、夢じゃない。

「……何才チ？」

「何？」

何つて、こつちが訊きたいくらいです。

とりあえずお腹一杯食事を楽しんで、もう二度と見れないかもしれない綺麗な夜景も存分に楽しんだ。

「満足？」

「うんっ」

突然のペットサーブスにあたしの頬は弛みっぱなしだ。家で二人で居るのも好きだけど、こんな夜はとびきり大好き！

大満足なあたしと何やらゴキゲンな智くん（機嫌が良くなきゃ絶対にお出掛けなんてしてくれないほど出無精）は、手を繋いで道を歩いた。何気無い会話をしながら、例えば今日の舞台の話とかを。

また明日は分からないけど、あたし、すごくすごく幸せだった。

智くんの手は暖かい。大好きつて、気持ちはずがってくものなんだ。

智くんも、そうなのかな？もし智くんがあたしを好きになつてくれたら、どうしようもない駄目女なあたしでも、自分を好きになれるかもしれない。智くんだけが、あたしの苦しみを解放できる。あたしの未来に光をともしてくれる人だから。

そして、智くんの携帯電話が鳴った。暗い夜道に静かなメロディ。

人を愛することの大切さを学んだ、月の無い夜の事……。

第十四話：携帯電話

「もしもし」

電話をしている智くんの隣で、あたしは暇を持て余す。ジッと見てたら、電話ごしに聞く智くんの色っぽい声を思い出して、一人勝手にドキドキした。

あたしは暇を忘れて智くんを見つめ続けた。

「ミミ、電話かわって」

「え？」

「ケータイ。拾ってくれたんだってさ」

入れてあったはずのコートのポケットに手をつ込む。確かに無い。あたしは急いで智くんのケータイを受け取った。

「もしもし？」

『君が持ち主？良かった。どうしますか？何なら届けに行きましょうか？』

ケータイから、年若そうな男の声。

「いえ！そんな！悪いです。明日あたしから取りに行きますので、預かって貰えますか？」

なんて親切な人だろう。今時こんな人もいるんだ、なんて思いながら話す。大まかな時間と場所を訊き、あたしは通話を終えた。

「明日は俺仕事だけど、大丈夫か？一人で行ける？」

「もう！子供じゃないんだから！」

智くんが笑うから、あたしもつられて笑った。日々は、驚くほどゆっくりと過ぎていく。

ケータイは劇場で落としたらしい。近くに駅があったから、徒歩でも問題なく行ける距離。

「そういえばなんであの人、俺のケータイに掛けて来たんだ？」

智くんが首を傾げるから、あたしは意味深に笑ってみせた。

「秘密」

答えは簡単だよ。あたしのケータイのアドレス帳には、智くんしか登録されていないから。分かっているけど、教えてあげない。たった一人。オンリーワン。特別な、あなただから。

余談だけど、あたしのトップシークレットは、ケータイの待ち受けに智くんの寝顔隠し撮り写メを使ってること。

第十四話・携帯電話（後書き）

短いですね…… f ^
| ^
;

第十五話：思わぬ再会

今日は快晴だ。散歩するのたまには悪くないかも。あたしは駅から劇場までの道のりをのんびりと歩いていた。

ポカポカして、すごく気持ちいい。室内に入った時に、逆に不快を感じた程だ。

「すみません。小川内 俊さんこがうち ともって方いらっしゃいますか？」

とりあえず、チケット売り場のオジサンに、昨日聞いた拾い主の名前を尋ねてみる。

「お約束は？」

「はい。してます」

売り場のオジサンはファイルを取り出してパラパラと捲り出した。どうやら来客表のようなものらしい。

「お名前は？」

「あ……佐山です」

ずっとミミで居たから、本名はなんだか口にはいけないもののような気がしてしまう。なんでだろう、現実に引き戻されるような感覚に捕われて、怖い。

「はい、どうぞ。関係者パスです。これで中に入れますが、お帰り際にはお返し下さい」

「はい。あの、どこに行けば……？」

「あそこのドアを通って、通路の突き当たり右側の部屋が控え室です」

オジサンは指を指しながら丁寧に教えてくれた。あたしはお礼を言って、控え室に向かう。パスは首から下げて、何だか特別っぽくてワクワクした。

——コンコン

「どうぞ」

よく通る女の人の声。役者さんの一人かな？舞台裏という物に人並みに興味を持っていたあたしは、逸る気持ちを抑えながらドアを開いた。

「失礼しまゝす」

部屋の中は思ったより狭くて、あたしは失礼極まりないことに内心がっかりしてしまった。鏡と椅子が三つずつと、壁際に細長い口ツカーが五つ。それに、パイプ椅子がいくつか立掛けられていた。「えっと、佐山さん……ですよね？お話伺ってます。実はアイツ、まだ来てないんですよ。少し座って待ってて下さい」

「はい」

ショートカットの女性は気さくな感じで、敬語を使い馴れてない風なのが可愛かった。

あたしが言われるがままに近くのパイプ椅子に座ると、まるで図つたようにドアが勢いよく開かれた。

それはもう、ドアが壊れそうなくらい思いっきりね。

「悪い、紗香！遅くなった！」

「俊。遅い！もう来てるわよ」

男が振り向く。あたしと、目が合う。

ん？この顔……どこかで……。

「あ~~~~！！」

気付いた時には、もう手遅れで。

これもまた、運命。

第十六話：怒りと温もり

「ああ〜もうっ……思い出したらまたイライラしてきたあ!!」
あたしは頭を抱えて唸った。

「コレお前のケータイかよ!ちっ、拾うんじゃないかった」

「あたしだってあんたに拾ってほしくなんかなかったわよ!」

ここで会ったが百年目とばかりに、あたしたちは罵りあった。

なぜこんな事態に陥ったかといいますと……。皆さんお忘れかしれませんが、あたしのケータイを拾ったヤツが、前に河原で会った超ム力つきイヤミ男だったからである。

「……ほんつと可愛くねえ女だな」

ボソツと言うのやめて欲しい。

「ま……まあ、何だか知らないけど二人とも落ち着きな?知り合いだったの?」

「「全つ然!」」

仲裁に入る紗香さんは、いい迷惑だろうなあ……。なんて、自分のことなのに。

「早くケータイ返してよ!もう、帰るから……」

「そんな言い方して良いわけ?」

ヤツはあたしのケータイを見せ付けるように出してきた。見せびらかす、って言った方が正しいかも。

「っ返して、下さい」

有り得ない、屈辱。

「あ、あとさ。こいつ、昨日の電話の男?」

ヤツ……小川内は、あたしが隠し撮りした智くんの寝顔写メ待ち受けを指して言った。

「だったら何よ!あんたには関係ない!」

「まさかカレシ?お前みたいいな女に引つ掛かるなんて見る目ねえな。馬鹿なヤツ」

あ……なんか、今どつかキレたかも。いくらなんでも、あたしが嫌いだからって、そんな言い方酷すぎる……！

「うるさい！！」

気が付けば、自分でも驚くぐらいの大声で叫んでいた。部屋の中は、張りつめたように静かになる。それでも、あたしの怒りは静まらなかった。

「智くんを、バカにしないで！そうゆうんじゃない！カレシでもないし、あたしが勝手に……。あたしはいいよ！どうせバカだもん。何言われたって構わない！だけど、でも、智くんの事だけは絶対許さない……！！」

何が悲しいのかな。悔しいの……？あたしは涙を流して叫んでいた。

「俊！何泣かせてんのよ！大丈夫？」

「謝れ！智くんに、謝ってよ……」

あたしはその場にしゃがみこんだ。息が苦しい。

「……ごめん。その、そんなに大切だとは、思わなかったんだ」

「あいつもああ言ってるし、なんとか許してやって？ね？ほら、深呼吸して！」

背中を擦る手が優しく、愛情の欠落した家庭で育ったあたしには、暖かすぎて。涙はもつと溢れだした。お母さんって、もしかしたらこんな感じの手をしているのかな？一度だけでも、こうやって優しくしてくれていれば、あたしはもう少し救われたかもしれないに……。

ただの一度も、お母さんが優しくかった記憶はない。

「本当、ごめん。だからもう泣くなよ……。涙とか、弱いんだ。コア飲むか？」

霞む瞳で前をチラリと見ると、ヤツはキョロキョロ慌ててた。

差し出されたココアは、やっぱり暖かくて。心まで、染み渡る気がした。

第十七話：Family

暫くして、あたしがすっかり落ち着いたのを見ると小川内は言った。ココアはすっかり空っぽだ。

「お詫び、っちゃなんだけどさ。舞台上がってみるか？今日は公演休みなんだ」

「いいの！？」

「ゲンキな奴」

初めて見る笑顔で。なんだかすっかりわだかまりも溶けたみたい。泣き叫んだかいもあったかな？

「来いよ。こつち」

「ホドホドにね。団長に怒られるわよ」

立ち上がったあたしの背中に、紗香さんの声が当たった。

「分かってるって」

ヒラヒラ手を振る小川内の後ろを、あたしは黙って着いて行く。

あまりにズンズン歩くから、自然とあたしは小走りのような形になった。

「ここが、舞台！」

薄暗い通路を抜けて、まるで異空間に出たみたい。キラキラと、ここで輝いているのはきつと、夢の結晶。

「すごい……こつちから見ると広いんだね！」

「だろ？ここに立っていると、嫌なことなんか全部ちっぽけに感じるよな」

まただ。笑うと八重歯がチラリと見えて、ヤンチャな少年みたいな表情になる。とてもあたしにイヤミを言うときのあいつと同一人物だとは思えないな。ちよっぴり可愛いかもとか、思ってしまった。

「あ……えっと、小川内、さん」

「俊でいいよ」

「じゃあ、俊。あたし音響？って言うの？とか有るトコも見てみた

「い」

「ミキサールーム？ああ、別に構わないけど……」

その時、正面の客席入り口が開いた。

「なぐんか声がすると思ったら、また小川内か！」

入ってきたのは30代後半くらいの女性で、長いウェーブのかかった髪を後ろで一つにまとめている。

「「神聖な舞台で何してる」」

二人がピツタリハモるから、あたしはすっかり驚いてしまった。

「もう聞き飽きましたよ。団長」

「聞き飽きるほど言わせるな」

女の団長なんて、なんだかカッコイイなと思いながら、年を物ともしないスタイルの良さに、なんだか納得する部分もあった。

「で？このガキンチョは何？小川内のガールフレンド？だぐれが部外者を連れ込んで良いって言ったかしら？」

「違いますよ。今日だけ、見逃して下さいって」

「とりあえず舞台から降りなさい」

俊は軽やかに舞台を飛び降りた。あたしも急いで降りようとしたけど、意外と高さがあって躊躇してしまう。俊に手を貸して貰い、あたしは何とか舞台を降りた。

「んー……あんた。名前は？」

「佐山です。佐山 響」

「響ちゃんか。あんた、入団してみる？もちろん舞台には出れないけど、みんなの手伝いをしてくれればちゃんと給料も払う。なんなら寮だって用意するよ」

どう？と、団長は目配せする。

「残念でした！団長。今回ばかりは、アテが外れたかもよ。響には大事な人が居るんだってさ」

いつの間にか、響って、呼び捨てなんですけど。別に、いいんだけどさ。なんかくすぐったいような……。

「あたし、何にも出来ないし、きつとお約には立てないと思います」
「いいんだよ、そんなことは。ただ、響ちゃんも心に重たいもん抱えてそうだったからね、誘ってみたのよ。ここは、そんな奴らばかりの集まりだから、あんたもきつと家族になれる」

「……家族」

「そう。うちの劇団員はみ〜んな家族みたいなモンよ。気が向いたら、いつでもおいでね」

魅力的な話だった。すごく、すごく大きな人だなと思った。あたしなんかでも、自分の力でやって行けるかも。いつまでも智くんに、迷惑をかけ続けるわけにも行かない。

「少し……考えさせて下さい」

「待ってるよ」

それでもまだ、あたしには踏み出す勇気が足りなかった。

智くんと離れ離れになることが、側に居られなくなってしまふことが、とてつもなく怖い。

……あたしは臆病者だ。

夕暮れの帰り道。肌寒さすら感じない程、あたしは深く考え込んだ。

第十八話：依存

「ねえ……智くん」

「何？」

約一週間が、経った。

今日は午前で帰って来た智くと、ソファでDVDを観ながら。
「あたし、さ……。ずっと、此処に居てもいいのかな……」

あたしは膝に顔を埋めて、ボソリと呟くように言った。今のあたしには、これが精一杯。

「どうした？そんなの当たり前だろ？何かあったなら言っただけ欲しいな。俺で力になれるかは分からないけど」

「ううん。何でもないの。なんでも……」

智くんの声は優しさに満ちていて、近くに居るだけでこんなにも安らいで。失いたくない。一生隣で笑っていたい。だけど……。

「心配するなよ。俺はちゃんと此処にいるから」

きつと、それはあたしじゃなくって。

「……ミミ？」

あたしはいつだって選ばれない。一番大切な人に、一番大切だっ
て思っただけで貰えないから。

「智くん」

「ん？」

あたしは、がばつと顔を上げた。

「オナカ鳴りそう……」

「じゃあ先に飯にするか」

智くんが笑ったから、あたしも笑う。心のなか、本当はどしゃ降りの雨だけど、ひた隠しにして誤魔化した。

「よお」

「こんにちは」

あたしは初対面の時の河原の土手に、俊の姿を見付けて歩み寄った。買い物に行くところだけど、まだ時間には余裕がある。

「来ねえの？劇場」

目の前に広がる川は、穏やかに陽の光を反射してる。

「……ううん」

「早く来いよ。団長、待ってるぞ」

俊は着ていたシャツを脱ぐと、地面に敷いてあたしを座るように促した。

「いいよ！汚れちゃう」

「いいから座れって」

手を引かれて、あたしは強引に俊の隣に腰掛けさせられた。気持ちは凄く有り難い。

「……ありがとう」

「どういたしまして」

満足げな表情。強引さは何だか新鮮だった。

「ここで何してるの？」

あたしが尋ねると、俊は横から冊子を持ち上げて見せた。劇の台本かな。

「コレ。今やってる舞台なんだけど、練習してるんだ」

「一人で！？凄い……練習熱心なんだね」

「や、もつといっぱい練習しなきゃ。俺なんかまだまだ舞台には上がれない」

俊は少し寂しそうに肩をすくめた。

「俊は舞台には出てないの……？」

「ああ。俺もさ、去年団長に拾われたんだ。それまで演技なんて全然興味なかったけど、今はあの舞台に上がるのが一番の夢なんだ。いつか絶対、役貰ってみせる！」

そう言って笑った俊の顔は、あの大きな舞台と同じく輝いていて、

ほんの少し妬けた。羨ましいよ、そんなに嬉しそうに夢を語れるなんて。

あたしにも夢なんてあったかな……。幼い頃はそれなりに考えた筈なのに、ちっとも思い出せなかった。夢なんて、あたしには縁遠いモノ。

「あゝ…劇団来る話。なんか変な遠慮とかしてるならいらないぜ？ そんなのもったいない」

「うん、でも違う。……あたしの、ケータイの待ち受けの人」

「大切な人、か」

あたしは小さく頷いた。

「家にね、住まわせてもらってるの」

あたしは秘密を打ち明けるかのように、ゆっくりと噛み締めて話していた。

「離れたくない。近くに居たい。……だけど、迷惑かけたくなくて、劇団に入りたたって思ってるのに、足が前に進まないの。行ったらもう二度と引き返せない気がして、ここから動けない……！」

好きで、好きで。好きすぎて泣けてくる。いつの間にこんなにも依存して、智くん無しじゃダメな体になった？

「響」

頭を撫でる手、智くんと似ていた。それでも確かに違うのは、大好きな人の温もりは別格だから。

「俊っ、あたしいつまでたっても進めないかも……」

「焦るなよ？焦って道を間違えたって意味がない。劇団は、逃げないさ」

あたしは何度も小さく頷いた。聞いてもらえて、心がずっと軽くなる。

悩みを聞いてもらえる友達なんていなかったあたしには、特別な経験だった。

あたしは変わった。人間嫌いで世界を呪っていた昔が嘘みたい。——智くんを愛して、あたしは変わった。

第十九話：自分の道

変わらないのは、きっと、この気持ちだけ。
揺るがないのは、あなたを好きな想いだけ。
幸せに、なりたいよ……。

まだ陽も昇らぬ早朝、智くんは深い夢の中。眼鏡を取った無防備な顔を背にして、あたしは外に出た。起こさないよう、音もたてずに。

小雨が降っているけど、傘は持っていない。濡れることなんて、気にならなかった。

あたしはもう一度だけ、懐かしむようにマンションを見上げた。
まるでドラマの中の出来事みたいに遠くって、全然実感が沸かなかった。

それでもはつきりと思い出せる。智くんと、離れた日。あたしの自立の第一歩……。

サヨナラ、智くん。ごめんなさい。何も言えずに出ていくあたしを許してね……。

ありがとう。

「響！こっち手伝ってちょうだい」
「はいっ」

「響ちゃ〜ん、そのドライバー取って〜」

「はい！ちよつと待って下さ〜い！」

日々はひたすら慌ただしく過ぎ、悩んでる暇なんてない。雑用の仕事でも、皆に色々頼まれるのは嬉しかった。

あの日、誘われてから一ヶ月。あたしは正式に劇団の一員になった。初顔合わせの時、俊、紗香さん、他にも沢山の人が、あたしを暖かく迎えてくれた。

毎日は充実して、とても穏やか。あたしを蔑すみ、邪魔なものと見て見るあの瞳を見ることもない。

皆いい人ばかり。そう、とてもいい人……。

声を失った大道具さん、車椅子の衣装さん、施設育ちの子供達、親を捨てた人。行き場を無くした人間の集まり……。

心に傷を負った者達の集まりは、酷く心地よく、優しくった。皆が皆、相手を気遣い、思い遣り、慰め、慈しむ。ここでは争いなんて起きなかった。人の醜さを知っているから。互いに辛さを共有して……。

皆、家族だつて。あたしもそう思えるかな。思つて貰えるのかな……。

それなのに、何故かあたしには、彼等がどこか互いに距離を置いてるように思える。傷付けないよう、心の内側には干渉せず、傷付かないよう、自分の内面も本当には見せていない……。

あたしの選択は、正しかったのかな？

「ねえ、智くん……」

夜になると、誰かのすすり泣く声が聞こえる。眠れぬ夜を、今この時、一体何人のひとが過ごしているの？

狭い寮の自室。淡い月灯りの元、あたしの頬にも暖かな雫が溢れた。

「……会いたい、よお」

あたしが決めた道。あたしの歩む道。この先あなたと交わらなくても、あたしは生きていかなくちやならない。
大きな手の温もり、してくれたたくさんの事、決してわすれないよ。

あなたを、愛してるから……。

第二十話：会いたくて

ここでの生活もすっかり馴れて、毎日とはただ単調になった。

仲の良い人、悪い人。綺麗に見えた劇団内にも、火はくすぶっていた。あたしは嫌われるのを恐れ、必死でイイコの仮面を被る。

恐くて、恐くて、あたしの中にも確かに真っ黒な何かがあるのが恐くて……。キレイ事言っただけ、あたしはとうに汚れているんだって、嫌でも思い起こされて……。

ああ、

智くん、

智くん、

思い出すのは、智くんの事ばかり。

あのすっきりとした無機質な部屋が恋しい。ほんのり香るコロンの匂いも、眼鏡の痕を触る癖も、低い声も……。日がたつにつれ、霞むどころか鮮明に蘇って。

もう限界だよ……。

ある日、買い出しに出かけたあたしは、街で静羽さんを見掛けた。あたしは思わず立ち止まり、どうしようかと考え込んだ。

静羽さんは向こうから、人混みに紛れてどんどん近付いてくる。少しくらい、智くんの様子を聞くくらいなら……。

そうこうしてるうちに、静羽さんがあたしに気付いてしまった。今度は真っ直ぐに、あたしの所へ歩いて来る。どうしよう、何て言えば……。

静羽さんが目の前に。あたしはとりあえず挨拶をしようとした。

——パンツ！

一瞬、何が起こったのか分からなかった。反射的に、痛む頬を押さえたあたしは、やっと叩かれた事を理解した。

「な……んで？」「よく言うわよ！あたしから智範を寝盗つとして！あなた、妹でもなんでもないんですって！？」

更に混乱した。ナンデシッテイルノ？

「寝盗る……？」

「同棲してたんでしょ？信じられない！本当なら、こんなんじゃ足りないくらいよ！」

同棲……？違うよ、あたし達何も無い。あたしは、ただのペットで……。静羽さんは、彼女でしょう？

「あたし……」

「何よ？こないだの威勢はどうしたの？まさか、聞いてないの？あたしと智範が別れたこと」

「知らない！そんなの聞いてない！………なんで？いつから？

どうして……？

「あなたのせいじゃない！本当にムカつく女！………仕方がないから、別れてやったのよ！あたしに気のない男なんてつまらないからね！」まさか智くんが、あたしを大切に思ってくれていた……？

こんなに嬉しいことを、こんなに最悪なタイミングで聞くことになるなんて……。

何も言わずに出てきてしまった。お礼も、謝罪も、気持ちも、なに一つ伝えずに。今更、あの家に帰ることなんて不可能だ……。

「ちょっと、泣いてるの？泣きたいのはこっちの方なんだから！まるで私が泣かしてるみたいじゃない」

「……めんなさい。あたしっ………ごめんなさい！」

涙は止まることを知らずに、次から次へと溢れ出す。

あたしは何故、誰に謝っているの？

「もう、分かったから！しっかりしなさいよ！」「ごめんなさい……」

智くん……。

今、どうしてる？あたしが勝手に出てきて、怒ってる？悲しんでる？それとも心配してる……？

側に居たい。

声を聞きたい。

好きだよ、智くん。

会いたくて会いたくて会いたくて……。想いは日に日に重くなる。夜は特に狂いそうなくらい寂しくて。もう耐えられそうにない……。

智くん、

あの日みたいに、またあたしを見付けてよ。暗闇の底から引っ張り出してくれた、あの秋の日。

ねえ、お願い。

迎えに来て……。

第二十話：会いたくて（後書き）

祝二十話！―やっとここまでやって来ました！（＜＞）

私の遅過ぎる更新に着いてきて下さっている読者様、感謝です。感激です。そして感動です。

お話はもう少し続きますが、どうか、最後までお付き合い下さいませようお願いしますm（――）m

皆様に少しでも楽しんで頂けたなら本望です。

第二十一話：moon light・（前書き）

長らく更新停止してしまい、申し訳ありませんでしたm（|＿|）m
やっと話の終わりが私なりに見えてきた感じですよf^_^；

第二十一話；moon light．

空に穴があいてる。

違う、月だ。いつの間に夜になったんだろう。頭がクラクラした。なんだかいろいろ考えた筈なのに、全てが無意味に流れ去っていった。ごちゃごちゃしてて、真っ白。あたしの頭の中。

気が付けば、あたしは薄暗い街頭に導かれるように、劇団の前まで辿り着いていた。

「……智くん」

両手には買い物袋。ちゃんと買ってきた頼まれ物。現実が、なんだか遠く、遠く感じた。

「わっ」

背中を押され、あたしは驚いて振り向いた。後ろに居たのは、俊。ニヤリと笑う彼は、夜なのに太陽みたいだ。

「もう！」

「何ボーツとしてんだよ？早く入れば？」

「ちよつと考え事」

そつえば、智くんはよく月みたいに優しく笑ってたっけ。あたしの心の闇に、光をくれた……。

「悩みごと？俺で良ければ聞くけど」

「ううん。平気！……答えはもう出てるから」

決めたの。智くんの家を出てきたあの日に。

今更、答えは変えられない。

「響」

「何？」

「泣きそうな顔！最近ずっと、心から笑ってないだろ」

笑っているつもりだった。無理にでも口の端を持ち上げて。

「演技下手くそなんだよ」

「俊……」

俊まで悲しい顔。人に心配をかけてしまつほど、あたしは不安定だったのかな。

「ありがとう。でも、大丈夫」

これ以上心配をかけたくなって、あたしは精一杯微笑んで言った。

入り口に向き直ると、肩を掴まれ引き留められた。突然包み込まれた腕の中は暖かくて、ドキドキした。名前を呼んだら、腕にギュッと力がこもった。

「好き」

頭が、真っ白になる。

「辛いんだろ？俺がずっと側に居るから、前のヤツじゃなくて俺を好きになつて」

俊が、あたしを？嘘、いつから？

「もう忘れるよ」

あたしは必死に首を横に振っていた。

「や……いや、忘れたくない！智くん、智くんに会いたいよぉ」

涙が溢れた。泣きじゃくるあたしの頬に、俊の唇がふれた。目を閉じる間もなく、すぐに唇にも。

「俺じゃダメ？」

「……違うの」

たつた一度だけした智くんとキスとは何もかもが違う。胸が高鳴って、それだけで天国に行けそうだった。俊が嫌なんじゃなくて、智くんが特別すぎて……。

「ごめんなさい」

やっと気が付いた。失ったものの大きさ、重さ。あたしの心の殆んどが智くんによって占められて。あたしはきっと、智くんなしじゃ生きていけない。

「響……」

体の拘束が緩む。あたしはそつと俊を引き離した。

「ありがとう。俊のことは大好き。でも、あの人はあたしの全てなの。大袈裟かもしれないけど、多分」

智くんじゃなきゃ。

「……帰れよ。もう、出てくんだろ？」

「うん。でもちゃんと戻ってくるから。また明日ね」

今度こそ、心から笑えている気がした。一秒でも早く顔が見たくて、振られてもいいから伝えたくて、あたしは駆け出した。

「響！頑張れよ！」

走って、走って、走って。足がもつれるくらい走った。やっとマシヨンが見えてくると、その距離がもどかしくて。

もう日付が変わりそうだ。

満月が、あたしを応援してくれているような気がした。

第二十二話・願いの叶う時

心臓が破けそう。

走ったせいで、呼吸も荒く、最近上手く眠れなかったから、少し目眩もした。

額に滲んだ汗を拭う。エレベーターの中、微かな機械音。

満月の夜、人間は興奮するんだって聞いたことがある。

だとしたら、多分あたしは今、人生で一番興奮してる。

そのドアの前に立っても、なかなかチャイムを押す勇気が出なくて。あたしはただボーツと表札を眺めていた。

やっと冷静になってきて、呼吸もすっかりもと通りになって。いよいよ覚悟を決めた時だった。

「ミミ！？」

突然開いたドアと、目を丸くして立ちつくす彼の姿。部屋着のままで、出かける所という風でもない。

「た、だいま」

「本物……？」

そつえばあたし、何を言うのか全然考えてなかった。会いたい気持ちだけで帰ってきて。

「あの、あたし……なんだろ。もう、智くんが急に開けるから！」

「気配を感じて。でも、本当に居たからびつくりした」

「ウソ!？」

「本当だよ。気配を感じたのは今日だけじゃないんだけどね」

そつ言つて、智くんはにっこりと笑った。困ったような笑顔。

「怒ってないの？あたし、勝手に出て行って……」

「怒ってないよ。でも、心配で心配で、少し寿命が縮んだ気がする」

「……ごめんなさい」

智くんの手があたしの腕をつかみ、ドアの内側へ引き寄せる。あ

たしはゆつくりと部屋へ足を踏み入れた。

「おかえり、ミミ」

受け入れられて、嬉しくて涙が溢れた。

「智くん……」

「泣くなよ。もう、無事で居てくれただけで十分だ」

懐かしい温もりが、あたしの頭を撫でてくれた。涙腺はますます緩くなつて、次々と溢れる雫は止められなかった。

「毎日毎日、必死で探してたんだ。お前が居ないと、この部屋は静かすぎて……」

「大好き」

やっと言えた一言に、智くんはそつと微笑んで、あたしの体を抱き締めた。

「俺も好きだよ」

二度目のキスは、コーヒーの味がした。あたしは必死で智くんにしがみついて、地面に座り込んでしまいそうになるのを耐えた。体が熱くて、溶けちゃいそう。

「智くん」

夢中で求めあうようなキスの合間に呟いたのは、あたしの世界で一番の願い事。

「結婚して」

「…結婚!？」

相当驚いたのか、智くんはしばらくあたしの顔をマジマジと眺めていた。

「やっぱりダメか。結婚なんて、あたしなんかとじゃ嫌だよね。」

「いいよ」

「え?……今、なんて?」

「明日にでも、婚姻届けを取りに行くよ」

信じられなくて、また瞳が潤んできた。

優しく触れる唇の柔らかさに神経を集中して、この上もない幸せを噛み締めた。

すっかり力の抜けたあたしの体は、易々と智くんに持ち上げられた。

「やつ、重いから降ろして!」

「全然軽いよ。ところで、どこに運んだほうがいい?」

そう言って笑う智くんは、ものすごく楽しそうだった。

運命論なんて信じてないから、彼に出会えた偶然に、心から感謝してるよ。

エピソード

目を覚ますと、朝の淡い光がカーテンの隙間からさしこんでいた。薄明るい室内は、彼の香りで満たされている。

暖かな温もりがまだ隣に在ることに安心して、あたしはゆっくりと伸びをした。

そうだ、今日は日曜だった。

「おはよう」

「あ、起こしちゃった？」

あたしは智くんに寄り添った。

「さつきから起きてたよ。ミミの寝顔を見てた」

「そんなの見なくていいよ」

恥ずかしいから、いちいち言わないで。

「朝飯食べるか？」

「んーん、まだこのままがいい」

「そっか。俺も」

智くんの腕があたしの体を包み込む。すっぱり収まって、こんなにも居心地のいい場所、他にはない。

「生きるのに、権利とか意味とか、そんなの必要なかったんだね」

「急にどうした？」

あたしは首を振る。

「うつん。こっちの話」

ふっと、智くんが何かを思いついたみたいな顔をした。

「そっいえば、佐山 響さんの話が聞きたいな」

「えっ？」

「もうペットじゃないんだろ？俺、響のことは何も知らない」

今なら、話せるかもしれない。苦しくて、泣いてしまっても、取り乱してしまうかもしれないけど、智くんだったら。

辛い過去は、消しされなくてもせめて乗り越えて。そうだね、智

くん。

「あたしね……」

あたしはゆつくりと話し始めた。自分の過去を、産まれた時からゆつくりと記憶を辿って。

それは、佐山 響という一人の孤独な女の子の物語。決して楽しいものではないけど、智くんなら受けとめてくれるって信じてる。

こんなあたしを拾ってくれた智くんだから。

最後まで話しきった時、あなたはどんな顔をしているかな？

あたしは初めて本当の意味で、人に心を開こうとしているんだと気付く。

ありがとう、智くん。

あたしは今、幸せです。

愛してくれて、ありがとう。

——ありがとう。

- E N D -

エピローグ（後書き）

今まで読んで下さった読者様、心からのお礼を申し上げます。皆様のおかげで、長い時間はかかってしまいましたが、なんとか完結することが出来ました。

皆様の心の中に、少しでも何かを残すことが出来たなら幸いです。本当に、ありがとうございましたm（――）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0984a/>

猫の居る部屋

2010年10月8日14時49分発行